

ハミシワタイ

先日、棚原の公民館で、昔の道について伊波善英さん、伊波精吉さん、伊波喜恒さんから話を伺っていたところ、「昔は森川や千原へ行くのに、川底に石を置いて、その石から渡っていきましたよ。」という情報を得ることできました。川を渡るために石が置かれていた所を方言で「ハミシワタイ」と言ったそうです。「ハミシ」とは「はめ石」のことで、「ワタイ」とは「(川を)渡る」という意味からきているのでは



森川のハミシワタイ。飛び石のように渡っていたそうです

ないかということでした。しかも、現在も残っているはず…ということで、後日、伊波喜恒さんに案内して頂きました。

ハミシワタイは棚原から森川へと渡る所と棚原から千原へと渡る所の2カ所あります。まず、森川の方を確認することとなり、草がうっそうと茂っている中をかきわけながら、進んで行くこと、清流が流れる小川に出ることができました。そして、川岸に立ちハミシワタイを探すと、ありました！自分が立っている場所がハミシワタイの一部だったんですね。しかし、残念ながら向こう岸まで続くハミシは完全には残っておらず、また、川岸のハミシもセメントで補強されていたりと、昔のような風景を見ることはできませんでした。そのあと、千原のハミシワタイも確認に行きましたが、近年河川工事が行われたこともあり、様変わりしていた探すことができませんでした。

しかし、今回の調査では伊波喜恒さんらのお話からたくさんのお収穫がありました。森川のハミシワタイは宜野湾に行く道として大いに利用されていて、島尻方面の方も通ったそうです。その理由として宜野湾には琉球八社の一つである普天間宮があることや大山には戦前、軽便鉄道の駅があったことがあげられます。一方、千原の方はというと昔、沖縄初の茶山があったこと、山林地帯で木材の乱伐を防ぐために山番がいたことなどから、それらに関わった人々が利用していたものと思われます。また、現在の琉大キャンパス内にシージマタヌ嶽という御嶽がありますが、そこに参拝するために地元の人々は利用したのでしょう。

ハミシワタイのエピソードもたくさん聞くことができました。水が多い時にはズボンの裾をまくって渡ったり、逆に水が少ない時は滑ったので、よく転んだそ



石が積まれた跡が残っています(森川)

うです。また、子供達は水遊びをしたり、エビやウナギなどをとって食べたことなど懐かしそうに話して下さいました。

昔の道を辿っていくと、その頃の生活や情景が目に見えかけます。道一つにも歴史やたくさんの思い出があるんだと実感させられました。私達のまわりでは便利で新しい道が造られていく反面、昔の道がだんだんと少なくなり、記憶からも薄れつつあります。私達はそれらの道を町民の方々の思い出とともに「町史」に残していきたいと思っています。